

解説 秋山 清

増補

私の見た  
日本アナキズム  
運動史  
近藤憲二

麦社

私の見た日本アナキズム運動史

近藤憲二

麦社

¥300

麦社

## 売文社の創立

赤旗事件（明治四十一年）で入獄していた堺利彦が出たのは明治四十三年（一九一〇）九月、大杉栄が出獄したのは同年十一月。幸徳伝次郎らはいわゆる大逆事件のため捕えられて獄中にあり、その他の同志も四散して、運動はまったく沈滞をきわめたときである。

同年の暮、堺は、獄中で考えてきた「売文社」をはじめた。売文社はその名が示すとおり、文章の立案、代作、翻訳をもって業とするにあり、その広告文には次のように書いてある。

「小生はやや上手に文章を書き得る男なり。いづれ文を売って口を糊するに何の憚るところあらん。今回断然奮発して左の営業を開始す。既知未知の諸君等、続々御用命あらんことを希望す。」

もちろん堺一個の生活のためなら、とくに売文社にもおよばなかつたであろうが、彼は反動期における同志の生活と結合について考えるところがあつたのであろう。

初期の売文社は堺利彦と白柳秀湖の経営ということになつていたと思うが、やがて大杉栄、荒畑寒村がみずから「売文社技手」と称して来り加わり、その後、幾多の変遷があり、前後はあるが、ともかくも一応売文社に籍をおいた人の名をあげると次の人たちがあつた。

赤旗事件の百瀬晋、同志社の脱走組であり、後に『資本論』を訳した高島素之、社会主義演歌師として知られていた添田啞蟬坊の息添田知道、山川均、後に水平の行者と称せられた栗須七郎、幸徳事件に連座した古河力作の弟古河三樹松、かつて不敬事件にひつかつたことのある橋浦時雄、後に高島らとともに国家社会主義をとなえた北原竜雄、尾崎士郎、後に大杉らとともに『労働運動』に拠つ

た久板卯之助、和田久太郎、近藤憲二、その他、なお社友として馬場孤蝶、安成貞雄、安成二郎、久津見蔵村、山口孤劍その他があり、小川芋銭、江渡狄嶺、土岐善磨等々などもなんらかのつながりをもっていた。

この売文社は大正三年(一九一四)一月、売文社の広告機関兼文芸雑誌『へちまの花』を創めたが、翌大正四年九月これを改題し、社会主義の機関誌として月刊『新社会』を発刊するに至った。この『新社会』の創刊号に、堺は「小さき旗上」と題して次のごとく書いている。

「鬨をつくって勇ましく奮いたつというほどの旗上げではもちろんないが、とにかくこれでも、ちびた万年筆の先に掲げた、小さな紙旗の旗上げには相違ありません。まずは落人の一群が山奥のほら穴に立てこもって、容易に敵の近づけぬ断崖をたのみにして、ワラビ、クズの根に餓えをしのがき、持久の策を講ずるといふ、みじめではあるが、かつはいささか遠大の志を存する義軍の態度であります。従つて、あすやあさつてに山を下つて、敵の戦線に逆襲を試みるという企てもなく、またそれだけの実力もない。その点は敵軍におかれても当分ご安心あつてしかるべく存じます。ただ遠近の同族とわずかに相呼応して、互に励まし慰めつつ、おもむろに時機を待つのは、かなり堅く致しておるつもりである。

さりながら、この退いて守る山寨をも、なお必ず果絶せねばならぬというので、敵の大軍が強いても押よせて来るならば、それはぜひに及ばぬ。いさぎよく一戦を試みて運を天にまかせるの外はない。もしそれ、来つてこの山寨に投げ、あるいは遙かにこの孤軍を援けんとする者があるならば、戦術の相違、軍略の差異、それらは今深く争いだてする必要はない。ただ大同に従つて相共に謀ればよい

と信じている」

これは『新社会』の発刊の辞であるが、一面、売文社経営の堺の態度だったともいえる。

売文社には絶えず同志が出入して、社会主義各派を包容するクラブのごとき観を呈し、自然そこから新しい運動がはぐくまれるのである。売文社は、この意味において反動期に際し大きな役割を果したものとわなければならぬ。

### 『近代思想』の創刊

いわゆる大逆事件によつて、幸徳伝次郎ら十二名の同志が死刑を執行されたのは、明治四十四年(一九一四)一月であった。大杉栄はその後まもないころ「春三月縊り残され花に舞う」と書いている。われらはこのなかに、政府の暴虐に対し全身の血を逆流させながらも、しかも洒落にかまえる彼の不屈な、ふてぶてしきを見るのである。

されば、すでに書いたとおり、売文社の一技手として売文のことにたずさわっていた彼も、反動の嵐の真ッ只中にあつて、荒畑寒村とともに大正元年(一九一四)十月、雑誌『近代思想』を計画し、実行するのである。

大杉は同誌の創刊事情につき次のごとく書いている。

「一昨年の暮、監獄を放免になる前、こんなことを思った。例の大逆事件以来、世間はさだめし物騒にちがいない。とても今までのような無茶ばかりやっておれまい。やむを得ずんば文芸雑誌でもやってみようか。しかし、出てみると世間は獄中で思ったよりもさらに物騒であった。手も足も出やし

ない。ぐずぐずしているうちに一年と過ぎ、まさに二年になんなんとする。なにか社会的に動いていねばやまぬ僕の本能は、そうそう黙っていられぬ……」

そして『近代思想』がはじめられたのである。

創刊当時の『近代思想』は科学、哲学、社会学などの抽象論、または文学などにかくれて知識階級の青年に社会主義的なる雰囲気を与えるという程度のもので、もとより純然たるアナキズム、ないし、サンジカリズムの機関誌というわけには行かなかつたが、しかしともかくもこの旗上げは、大逆事件以後の沈黙を破る呼子であつて、あるいは姿を消し声をひそめ、あるいは猫のごとく柔順を装つていた同志が、これによつてどんなに勢いづけられたか知れない。売文社が当時、運動の苗床であつたとすれば、『近代思想』同人の事業と行動は社会主義運動の復活を告げるラッパであつただ。

創刊号の巻頭には、鉄鎖でしばられたカットを入れ「愚かなるものよ」と題する一篇をのせているすなわち、**頭**

愚かなる。

太陽を捕え、朝の日光を、

縄もていましめんとする。

風に乗れ、あるいはまた、

走る流れに逆らわんとする

四季をこぼみて、雨を止めんとする。

という書き出しで、

「さなり、人の口をせかんこと、  
吹く風を捕うるよりも難きものを。  
愚かなるものよ。」

と結んでいる。反動的な弾圧にたいする挑戦であり、その気概の一端をうかがうことができる。

大杉栄、荒畑寒村をはじめ、執筆者は、安成貞雄、安成二郎兄弟、伊庭孝、上司小剣、土岐哀果（善磨）、佐藤緑葉、和氣律次郎、徳永保之助らであり、堺利彦も常にこれを援けた。

なお一方、雑誌のほかに毎月一回「近代思想社集會」を開いたのであるが、この集まりには、上記の人たちのほかにときに馬場孤蝶、内田魯庵、生田長江、岩野泡鳴、平出修、上山草人、仲木貞一、長谷川天溪らの人々も出席している。

かくて『近代思想』は漸次思想界、文壇に認められるにいたるのであるが、しかしこれは、ただに近代思想社同人だけの努力の成果と見るべきでなく、時代そのものが新しい方向への動きを見せていた、その事実をも見なければならぬ。

**踏**

すなわち、たとえば、平塚雷鳥らによつて、いわゆる新しい女の機関誌『青**踏**』はすでに発刊されており、同誌には無政府主義者エマ・ゴールドマンの『婦人解放の悲劇』が訳載されたこともある。『京都法学会雑誌』や『世界雑誌』にサンジカリズムに関する評論が掲げられ、当時の代表的総合雑誌であつた『太陽』に幸徳事件を取材した平出修の小説『逆徒』がのせられたこともある。貴族の坊ちゃんたちによつて文芸雑誌『白樺』が発刊されたのもこの時代。

一部の人たちに『近代思想』が問題にされるような時代がつけられつつあつたことも、われわれは

同時に知っておかねばならないであろう。

### 『近代思想』から『平民新聞』へ

『近代思想』は号を重ねるにつれて、次第に鋭鋒の切っ先をあらわしはじめた。雑誌発刊の目的が鉄鎖に対する反抗の叫びであることが、誌面のいたるところにうかがわれるようになった。おさえきれない創造的運動のふくらみが誌面を動かしはじめた。同時に堺利彦らの社会主義にたいして、無政府主義、アナルコ・サンジカリズムの思想が大きく脈うちはじめたのである。

幸徳事件以前すでに存在していた社会主義運動における二つの流れ、すなわち社会主義と無政府主義、さらにいいかえれば議会政策と経済的直接行動との二つの流れが、ここにまた新しい流れを見たのである。

したがって近代思想社の事業は雑誌の発行だけに止らず、翌大正二年七月から「サンジカリズム研究会」を開くことになった。研究会は、斎藤兼次郎、野沢重吉、吉川守園、橋浦時雄、百瀬晋、村木源次郎らの旧い同志に幾人かの新しい青年を加えた十幾人の小さな集まりにすぎなかったが、大杉と荒畑とは欧米社会運動の現況や、クロボトキン、バクーニンの思想を紹介し、あるいはまた具体的戦術などを論じて、熱心にこの集まりを育てていた。

ところが、この研究会が熱を加えるにつれて、会員中の旧い同志の心もだんだんとただの研究では物足らなくなってきた。

大杉と荒畑も文学的な『近代思想』では、しんぼうできなくなつた。「正気の狂人」「賭博本能論」

などが雑誌にあらわれるとともに、冒険の快感を味わおうとするものが本能的に波うつてきたのだ。

大杉が『近代思想』の大正三年五月号に書いた「知識の手淫」と題する一文は、当時の彼等の心境を端的に物語っている。

「読者諸君の多くも同様のことと思うが、寒村と僕とはもうこの雑誌のようなインテレクチュアル・マスターベーションにあきあきしてしまつた。……僕等はこの不自然事につくづくいや気がさしてきた。……この意味から、僕等はもはや、今のままの『近代思想』の発刊をつづけてゆくことができなくなつた。形式も内容もまるで一変させなければ、もう承知ができなくなつた。ブルジョアの青年を相手にして、わけのわからぬ抽象論をするかわりに、僕等の真の友人たる労働者を相手にして、端的な具体論に進みたい」

かくて『近代思想』は、創刊後満二年、大正三年九月これを廃刊し、翌十月から月刊『平民新聞』の発刊をみるのであるが、しかしまた次のようにも書いている。

「……僕等の目的は、かなりの程度までに達せられた。ほとんど個人的興味にのみおぼれていた文壇の形勢は、多少の社会的興味に傾いてきた。もとよりこれは、僕等および他の文壇の進歩的思想家諸君の力ばかりではない。その可能的要素が、すでに思想界の中にふくまれてい、かついろいろなる社会的出来事の影響のあつたことは争われない。そして僕等および諸君はただそれを促進さす一役目をつとめたにすぎない。しかし僕等は、この僕等自身の役目についてずいぶん直接および間接の働きをしたつもりでいる」

『近代思想』にいや気がさしてきたことは事実であつたらうが、『近代思想』のなしとげたことに

たいしては、ある満足があり、自負するところがあつたらうことは、これによつてもうかがえるではないか。

### 月刊『平民新聞』の発刊

『近代思想』の廃刊は大正三年九月、そしてその翌月から月刊『平民新聞』が発刊されたが、第一号は四六四倍判十ページであった。

とくに平民新聞の名をえらんだのは、いうまでもなく、かつての日露戦争に際し非戦論をひっさげて立つた幸徳伝次郎、堺利彦らの日刊『平民新聞』、また森近運平の、半月刊『大阪平民新聞』（同紙はのち全国的機関紙となり、『日本平民新聞』と改題）の伝統を示すものであり、題字も幸徳の筆であった日刊『平民』当時のものそのままを用い、一面には幸徳の墓の写真がかかげられた。そして「労働者の解放は労働者自らの仕事でなくてはならぬ」——これが新しい『平民新聞』の標語であつた。

巻題には「労働者の自覚」と題し、

「われわれは労働者である。自己および自己の社会的地位を自覚せる労働者である。そして……現社会の根本的変革を迫らんとする反逆的労働者である。」

「雇主はわれわれの生活の協力者ではない。彼等は掠奪者である。彼等は、彼等が一切の生産機関を所有することを利用して、われわれの労働力を買うという名のもとに、実はそれを強奪する。」

「そして彼等資本家階級はこの生産機関を壟断し、われわれの労働力を掠奪する特権を維持せんがために、あらゆる社会的制度を利用し、また創設する。今日の一切の社会的制度は、ただ資本家階級

の防護のために存在する

「われわれは先ず、現代社会の根本に横たわるこれらの事実を、真に明確に理解せねばならぬ。……そして彼等掠奪階級が製造して、われわれ被掠奪階級に無理強いする一切の社会的・政治的・道徳的の理論と感情とを放抛して、……われわれ自身の世界を建設するとともに、またその社会的実現を謀らねばならぬ。」

「本紙の目的は、この確固たる自覚をわれわれの仲間の労働者の間によび起す手引となり、またこの自覚によつて欲求するわれわれの奴隸的地位の改善とおよびこの改善をさまざまの一切の社会的制度に対する階級戦争の反逆との、不撓の機関たらんとするものである」と極めて端的に述べている。

また第一次世界大戦は同年七月勃発したのであるが、しぜん、この『平民新聞』は、ヨーロッパ各国の無政府主義者、サンジカリストの動きにつき報道し、戦争にたいする労働者の反乱とそしてそれが社会的大革命に進展せんことを期待している。

また同誌は無政府主義者の国際語としてエスペラントが採用さるべきことを述べるとともに、その実践としてエスペラント欄を設けたことも記しておかなければならぬ。

しかしこの第一号は、発行と同時に秩序紊乱をもって発売禁止となつた。そこで第二号には「秩序紊乱」と題し、いわゆる秩序とは何ぞや、またその、いわゆる紊乱とは何ぞや、という書き出しで、「人類の多数が、少数の怠惰者のあくなき貪欲と怠慢と痴情とを満足せしめんがために、刻苦して労働する。これすなわち秩序である。……」

「人と人との、国と国との絶えざる戦争。海に山に空にとどろく銃砲。田園の荒廢。富の破壊、数万、数十万、数百万の若き生命の犠牲。これすなわち秩序である。

そしてついに鉄と鞭とによつて維持さるる、動機と感情と行為との束縛。したがつてその屈従。これすなわち秩序である。

「然らばこの秩序の紊乱とはなんぞや。あらゆる鉄鎖と障害物を破毀しつつ、さらによき現在と將來とを獲得せんがために、この秩序に反逆する。これすなわち秩序の紊乱である。

「かの秩序のためにほとんど死せんとし、あるいは死すべかりし生命を……まさに来らんとする社会的大革命への道をひらく。これすなわち秩序の紊乱である。……最もうるわしき激情の爆發。最も大なる献身。もつとも崇高なる人道愛の発現。これすなわち秩序の紊乱である。

「ああ僕らは、ついに、生涯を通じてこの秩序の紊乱に従わねばならぬ。秩序は僕等の死であり、紊乱は僕等の生である」

同志、読者からも「三斗の溜飲を下げた」「進め進め」と激励が多くとどいた。

### 『平民新聞』の廃刊

月刊『平民新聞』は、一号、二号、三号と発売禁止のつるべ打ちを食つたので、第四号は、『東京朝日新聞』から時の大隈内閣の司法大臣尾崎行雄の「欧州時局観」と題する社会革命論めいたものを転載して巻頭にのせ、全面転載記事のみをもつてうずめるという皮肉な編集をやつた。これがいけない

なら、尾崎法相みずから秩序紊乱の筆頭になるというわけなのである。

かくて第四号は初めて禁止をまぬがれたので、大杉、荒畑、野沢重吉、山鹿泰治、宮嶋資夫、同麗子夫妻ら九名がサンドウィッチ行列をやつて日比谷から銀座、神田、本郷、上野をねり歩き、新聞一千部を配布し、須田町で革命歌を高唱し、無政府主義万才を三呼したなどのこともあつたが、またもつづけざまの発売禁止にあい、遂に大正四年三月五日の第六号をもつて廃刊のやむなきにいたつた。

かく『平民新聞』は短命であつたが、幸徳事件以後の大反動期にあつて、最も端的に革命思想を鼓吹した先駆的役割をなしたものと、アナキズム運動史に忘れることのできないものである。

なお『近代思想』時代に「サンジカリズム研究会」として発足した集会は、この『平民新聞』時代には「平民講演」として継続され、新顔の労働者、学生も毎回三十名くらいは集つていた。愛国心の解剖、代議政治論、サンジカリズム、クロポトキンの思想、欧米社会運動の情勢紹介などがその主題目であつた。筆者が集まりに出るようになったのもこのころである。

なお当時、東京ではこの集りのほかに、堺利彦、高島素之、山崎今朝弥らの「社会講演」があつて別の流れをなし、渡辺政太郎、久板卯之助らの「研究会」は思想的に両派の中間にあつたということが出来るであろう。もつとも、どの集まりにも共通した顔ぶれも相当あつた。

横浜で中村勇次郎、板谷漂葉らが例会を催し、大阪で横田緑次郎が大阪平民社を設けたのもこのころである。

その間、渡辺政太郎、相坂倍、山鹿泰治らが、連日、嚴重な警戒網をくぐつて東京および付近の工場地帯に出没し、発売禁止の『平民新聞』の残りや、赤羽一（巖穴）の『農民の福音』を配布して捕

ったこともあり、二、三の秘密出版も行われた。

### 『近代思想』の復刊

月刊『平民新聞』が倒れて半年目に大杉と荒畑は再び『近代思想』を復刊した。名は以前に立ちもどったのであるが、内容は『平民新聞』六分、『近代思想』四分というところであった。社は小石川武島町にあり、その近くの旧水彩画研究所を借りきって、そこに宮嶋資夫妻が住み「平民倶楽部」と名づけた。やがてはここに図書館を設け、労働者のクラブにするはずであったが、家主の苦情で失敗に終わった。

この『近代思想』のときから赤旗事件出獄後、郷里岡山にあった山川均が加勢している。

しかし、これもまた発売禁止の弾圧にあり、経済的困難に立ちいたったので、大杉、荒畑のほかに吉川守園、川上真行、有吉三吉、百瀬晋、宮嶋資夫、同麗子、相坂倍、山鹿泰治、堀保子、荒川義英、古川啓一郎らで同人会を組織して維持にとめたのであったが及ばず、翌大正五年一月、第四号をもって廃刊した。

横浜の同志中村勇次郎、板谷漂葉の『解放』、東京吉川守園の『労働者』、大阪若林騰造の『煙』、函館久保田鬼兵の『足跡』、埼玉白倉甲子造の『へいみん』が発刊されたのもこの『近代思想』と相前後してであったが、いずれも二、三号で休刊もしくは廃刊した。

堺利彦の『新社会』が発刊されたのも、この第二期『近代思想』とほとんど同時の大正四年九月だった。

### 中国の同志たち

ここで、すこし話が後戻りするが、われわれ日本の運動とも関連のあった中国の同志およびその運動について述べておこう。

中国の無政府主義運動も、だいたい日本のそれと同じ年月の歴史をもっている。すなわち、一九〇七年（明治四十）六月、パリ在住の李石曾、呉稚暉らによって『新世紀』と題する週刊無政府主義雑誌が発刊された。

そしてそれとほとんど同時に、張継、劉光漢を主とする在東京の同志によって社会主義研究会がおこされた。社会主義の名のもとに、実は無政府主義の研究と伝道に従ったものであった。その集まりには、幸徳、堺、大杉などがたびたび出席している。彼等も、つねに日本の同志の集まりへ来ていた。やがて彼等は、週刊無政府主義雑誌の『衝報』を出したのであったが、しかしこれはいくばくもなく日本政府の迫害にあい、会も雑誌も解散、廃刊のよぎなきに至った。

そのころ、日本の社会主義者の間には、金曜講演という定期的な集まりがあった。東京本郷弓町の平民書房で開かれていたのであるが、たまたま明治四十一年一月の集まりが臨監警官のために解散を命ぜられ、憤慨した会衆は「富の鎖」を高唱して街頭を一巡し、再び会場にひきかえし屋上から群衆に向って演説し、ひと騒ぎあったことがある。いわゆる「屋上演説事件」である。このとき、張継も捕えられたのであったが、途中でずらかって行方をくらまし、そのまま中国へ帰ってしまった。後に中国国民党の有力者であった張継である。

パリの『新世紀』は約三カ年間にわたって発行を継続して、主として中国の外国留学生間に無政府主義と革命的労働組合主義の伝道をした(わが石川三四郎は渡仏後これら中国の同志と交りを結んだ)。

一九一一年十月、中国第一革命の際に、江亢虎の発起で上海に、「支那社会党」が設立された。これは「社会主義研究会」とは違ってほとんど全く社会民主主義的なものであった。そして翌年十月の大会のとき、党内の無政府主義的分子が分離して、別に新しく「社会党」を組織したが、いずれも直ちに袁世凱のために解散を命ぜられた。

これより先、一九一二年五月、師復は広東に「晦鳴学舎」をおこして、はじめて中国国内の無政府主義伝道に従った。そして同年八月、機関誌「晦鳴録」と数種のパンフレットを発行したので、政府はその禁止解散を命ずるとともに師復らを捕ばくしようとした。彼等男女同志十数名は印刷機械と活字をかついで澳門(マカオ)に逃げ、そこで発行をつづけようとしたが、中国政府の要求によりポルトガル政府にさまたげられたので、ひそかに上海に潜入し機関紙を『民声』(ラ・ヴォーチヨ・デ・ポポロ)と改題し、半月刊として発行した。四六判三十二ページで、半分は漢字、半分はエス文であった。

一九一三年(大正二)わが山鹿泰治は、この師復らの秘密印刷所に協力するため大連から上海に渡航した。山鹿は大連の満鉄発電所の試験室に働いていたのであるが、大杉栄から、師復(ジーフオ)が無政府主義運動を始めたから行って協力するよう依頼してきたので、直ちに上海に向ったのである。

師復は爆弾でちぎれた右手に義手をはめて原稿も書けば発送もやる。同志佩剛(ペイカン)はエス文を組む。師復の三人の妹たちは四六判十六ページ刷の印刷機を腕の力で回転させるのである。山鹿

はそれらの同志たちと六カ月間労苦をともにした。そして、日本で大杉たちが大逆事件後の弾圧の中に敢然として『近代思想』の旗を進めた報に接して、この運動に加わるため急拠東京に帰ったのであった。

ついでに記しておくが、師復はさらに「無政府共産主義同志社」を設立し、日本の同志と連絡したが、その後三年ほどして肺癆を病んだ。病篤しと見て同志は印刷設備を売って入院費にあてることをすすめたが、彼は「東洋にアナキストの所有する印刷所はこれだけだ、自分が死んでも宣伝をつづけてくれ」といって遂に主義に殉じたのであった。中国無政府主義運動の父と称せられる人である。彼の姓は劉であるが、姓を廃して単に師復といった。

どこの国の同志も常にこういう労苦をしているのだ。

#### 米騒動以前

一九一四年(大正三)第一次世界大戦が勃発し、日本も対独宣戦を布告したのであったが、日本の参戦は青島攻略をやっただけのほんの名ばかりで、戦争の被害は少なく、むしろ逆に軍需品その他の海外貿易は著しく発展し、それに伴って国内産業は異常な発達を遂げた。百万長者は億万長者となり、成金は続出した。

事業の繁栄につれて、労働者の賃金もあがったが、成金の跳梁と奢侈逸楽は、驚くべき物価騰貴を来し、物価と賃金との関係がいつもそうであるように、しぶしぶの賃金値上は、物価の暴騰に追いつけず、労働者ははなはだしい生活難に陥った。次の表は、当時の労働階級的生活状態を語っている。

| (年次) | (物価指数) | (賃金指数) |
|------|--------|--------|
| 大正元年 | 一〇〇    | 一〇〇    |
| 大正二年 | 一〇一    | 一〇二    |
| 大正三年 | 九九     | 一〇二    |
| 大正四年 | 九四     | 一〇一    |
| 大正五年 | 一〇九    | 一〇四    |
| 大正六年 | 一四五    | 一二〇    |
| 大正七年 | 二〇〇    | 一五七    |
| 大正八年 | 二三八    | 二二四    |

  

| (年次) | (件数) | (参加人員) |
|------|------|--------|
| 大正元年 | 四九   | 五、七三六  |
| 大正二年 | 四七   | 五、二四二  |
| 大正三年 | 五〇   | 七、九〇四  |
| 大正四年 | 六四   | 七、八五二  |
| 大正五年 | 一〇八  | 八、四一三  |

奸商や成金は全民衆の憤怒的となった。しかし政府はこの奸商らの種々な物価引上策にたいして、ほとんど何等のなすところもなく、またその多少の物価調整策も何らの効果を示さなかった。そしてストライキは激増した。

しかし金儲けに忙しい資本家とその擁護者である政府とは、この労働者の要求にたいして、ほとんど顧みもしなかった。

なお、第一次世界大戦はドイツ、オーストリアの軍国主義にたいするイギリス、フランス、アメリカなどの民主主義の戦いであると宣伝され、日本もこの後者に加担して参戦したのであるから、民主主義思想の進展には有利な情勢になってきた。吉野作造、大山郁夫、室伏高信らの民主主義が論壇を賑わせ、上杉慎吉の天皇神権説にたいして美濃部達吉の天皇機関説が圧倒的拍手をもって迎えられたのもこのときである。

こういう社会情勢の中にあつて、しかも戦後の労働運動の勃興が何人にも予想されるときに當つて、かねてサンジカリズムの研究宣伝を行いつつあつた日本の社会主義者が単なる思想宣伝に止つていゝるはずがない。端的に労働者の間への宣伝と組織とに向つて進もうとしたのはもち論であるが、依然たる官憲の圧迫は、その種々なる企図を永続的、大衆的ならしめることができなかつた。

すなわち荒畑寒村は『労働組合』を発行し、久板卯之助は渡辺政太郎とともに『労働青年』をはじめめた。もとより片々たるものであり、ながくは続かなかつたが、しかもこれらの中から幾人かの労働運動の闘士を生んでいる。そして渡辺方の例会「研究会」は当時の實際運動の主軸であつた。

また大杉栄は伊藤野枝とともに雑誌『文明批評』をはじめ、さらに和田久太郎、久板卯之助とともに

に『労働新聞』を発刊し、荒畑寒村は山川均、近藤憲二とともに『青服』を出した。いずれも労働者の団結を説いた程度のものであったが、毎号印刷所を妨害され、発売頒布を禁止されて、官憲の圧迫は言語に絶するものがあった。あたかもそのとき大正七年の米騒動が勃発したので、弾圧はいっそう熾烈をきわめた。そして両紙ともその第四号が新聞紙法違反に問われ、和田、久板、および荒畑、山川は四カ月ないし十カ月の禁錮刑に処せられたのである。

この新聞紙法違反の判決文には「被告は、同盟罷工と題し、某造船所における同盟罷工の状況を記し、暗に同盟罷工を懲懲する趣旨を述べ」また「労働階級の使命と題し、資本家と労働者とは相敵手たるを以て、労働組合を組織し、資本を労働者の手に奪うべき趣旨の各安寧秩序を紊乱する記事を編集発行し」云々と述べている。このくらいのことでも秩序紊乱でひっかけられ、牢獄に値したのだ。当時の言論範囲の見本として掲げておく。

### ロシア革命と米騒動

一九一七年（大正六）三月、ロシアに革命が勃発し、ロマノフ王朝が倒れてケレンスキー政府が出来た。

この革命の性格につき、日本ではその詳細はまだよく知られていなかったのであるが、同年五月七日、東京在住の各派社会主義者が、山崎今朝弥方でメデー集会を催した席上、高島素之、吉川守麿、山川均から、ロシアの事変に対し日本社会主義者の決議をロシア社会党へ送る提議があり、直ちに決議文の討議を行った。同決議文は、劈頭まずロシア社会党の成功を祝し、ロシア革命の歴史的意

義を明らかにするとともに、これにたいするロシア社会党ならびに万国社会革命団体の責任を力説し、同時に戦争に対する責任とこれにたいする希望を表明したものであった。ロシア社会党にたいし「銃を逆さまにして戦え」と激励した決議文が朗読されると、拍手がおこり、室内は一種の緊張を示した。この決議文は直ちにロシアをはじめ各国社会革命団体に送られ、その機関紙にも掲載されて反響をよんだ。

当時、アメリカに亡命していたロシア革命党員が、母国の革命に参加するため帰国の途中、幾人かが売文社を訪ねたこともある。

そして同年十一月、レーニン、トロツキーのボルシェヴィキ革命がおきた。ロシア革命！労働者の天下！この大事実がこの地球のうえに、われわれの住むこの地球のうえに、しかもツァーの専制國家に成し遂げられたのだ。ロシア革命がその後どんな道をたどったかは別として、当時、この事実の前に、全世界の民衆はおどりがあつたのである。

日本の思想界にもそのどよめきは聞えてきた。労働階級は甚大なる感銘を与えられ、日々の新聞に現われるその通信電報は非常な興味をもって読まれた。

しかしながら、好景気に酔った資本家と政府は、一種の不安を感じながらも、なお、それは外国のことで、日本のことではないという安心をもっていた。そこへ突然として、しかも当然に起つたのが、大正七年夏の米騒動であった。ロシアとドイツの革命をもって、遠い外国の出来事とみていた資本家階級も、この足もとの事実には戦慄せざるを得なかつたのである。

米騒動というのは、大正七年七月下旬、富山県下の漁民の女房たちが相談のうえ、町の米屋に米の